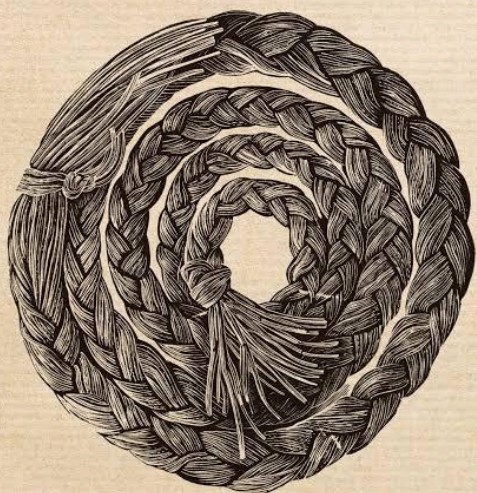




ニューヨーク州の山岳地帯。
美しい森の中で暮らす植物学者であり、
北アメリカ先住民である著者が、
自然と人間の関係のありかたを
ユニークな視点と深い洞察でつづる。
ジョン・ハロウス賞受賞後、待望の第二作。

植物と 叡智の 守り人

ネイティブアメリカンの
植物学者が語る
科学・癒し・伝承

ロビン・ウォール・キマラー 著 三木直子 訳

Braiding Sweetgrass
Indigenous Wisdom, Scientific Knowledge and the Teachings of Plants
by Robin Wall Kimmerer

筑地書館

イチゴの贈り物

ゲウイッチン族であり、父であり、夫であり、環境保護活動家であり、アラスカ州北東部にある小さな村アークティック・ビレッジの村長でもあるイーヴォン・ピーターが自分のことを一言、「川に育てられた少年」と自己紹介するのを聞いたことがある。川原石のようになめらかで捉えどころのない言い方だ。彼は、川の近くで育ったということを言いたかったのだろうか、それとも、生きていくのに必要なことを教え、彼を育ててくれたのが川だったということだろうか？川が彼の体と魂の両方を養ってくれた、ということか？川に育てられる——おそらくはそのどちらも当たっているのだろう。片方だけ、ということはまずあり得ない。

ある意味で、私はイチゴに、野原一面のイチゴに育てられたと言える。ニューヨーク州北部のメープルやアメリカツガ（米榎）、ホワイトパイン（米松）、アキノキリンソウ、アスター、スミレ、それに苔を無視しているわけではない。でも、世界とはどういうところか、私の居場所はどこかを教えてくれたのは、夏も間近な朝、露に濡れた葉の下になっている野生のイチゴだった。私たちの家の裏には、石の壁で分割され、耕作はとつくの昔にやめてしまったがまだ森と呼べるほど植物が成長していない古い牧草地が何キロも広がっていた。スクールバスが重たそうに坂を上って私を落とすと、私は教科書を入れた赤い格子柄のバッグを放り出し、母がいつける用事を思いつく前に服を着替えて、小川を飛び越え、アキノキリンソウの中を彷徨い歩いた。子どもに必要な土地の目印は全部頭の中の地図に記されていた——ウルシの木の下要塞、石が積み上がっているところ、川、枝がごく均等に出ていたので梯子みたいにてっぺんまで登れる大きなマツ

の木。そして、イチゴがかたまつて生えているところ。

花びらが白くて真ん中が黄色い、野生のバラに似たイチゴの花は、「花の月」を意味する *wabigwaniginsis*、つまり五月に、見渡す限りのカールグラス〔訳

注…イネ科ダントニア属の草〕の草原に点々と咲いた。私たちは注意深くその成長を見守り、カエルを捕まえるに草原を走っていく途中で三つ葉の下を覗き込んでイチゴの熟し具合をチェックした。とうとう花びらが散ると、その代わりそこに小さな小さな緑色の塊ができ、日がだんだん長くなり暖かさが増すにつれ、膨らんで小さな白い実ができる。酸っぱいが、それでも本物のイチゴになるまで待ちきれない私たちは構わず食べてしまった。

熟したイチゴは見る前から、湿った地面に注ぐ日光と混じり合ったその香りでわかる。それは六月の香りであり、夏休みで解放される前の最後の登校日の香りであり、「イチゴの月」、*ode mini-gizis* の香りだ。私はお気に入りのイチゴの茂みに腹ばいになって、イチ

ゴが葉の下で甘く、大きくなっていくのを見守る。小さな野生のイチゴの一粒一粒は雨粒ほどの大きさしかなくて、葉っぱの帽子の下に種がポツポツとついている。この恰好のポジションからは、一番赤くなった実だけを摘み、まだピンク色をしているものは明日のために残しておくことができる。

その頃から「イチゴの月」を五〇回以上数えた今でも、私は野生のイチゴの茂みを見つけたたびにびっくりする——私にはもつたいないという気持ち、赤と緑に包まれた思いがけない贈り物に込められた寛大さと優しさへの感謝の気持ちだ。「本当に？ 食べてもいいの？ 悪いわね」。五十年経った今でも、この寛大な振る舞いにどうやって応えたらいいのだろう、と考えずにはいられない。ときにはそれは、馬鹿げた問いに思える。答えは簡単だ——食べればいいのだ。

でも、そう思っていたのが私だけではないことを私は知っている。私たちの部族の創造神話では、イチゴがどこから来たのかは重要な要素だ。スカイウーマン

がスカイワールドからやってきたときにお腹に宿していた美しい娘は、緑豊かな地上で、他の生き物たちすべてを愛し、愛されながら育った。だがその娘を悲劇が襲う。フリント「訳注…石灰岩層の中に塊で見つかる黒灰色の石英」とサップリング「訳注…苗木」という双子を産んだ後に死んでしまうのだ。悲しみにくれたスカイウーマンは、愛する娘を地中に埋葬した。すると私たちが崇拜する色々な植物が、娘の最後の贈り物として彼女の体から育ったのである。イチゴは彼女の心臓から育った。ポタワトミの言語ではイチゴをode minと言う。「心臓の果実」という意味だ。私たちはイチゴを、ベリー類のリーダーと考える。ベリー類の中で最初に実を結ぶのがイチゴである。

この世界は潤沢な贈り物が惜しげもなく散りばめられたところだ、という私の世界観を、最初に形作ったのがイチゴだ。贈り物は、あなたが何もしなくても無償でやって来る——招かれもせずに、あなたの元へ。それはご褒美ではない。努力に対する報酬ではないし、

それと呼び寄せることもできないし、努力によってそれを受け取るに値する存在になれるわけでもない。それでもイチゴは姿を見せる。あなたはただ、目を見開いて注意を払いさえすればいい。贈り物というのは、人を謙虚にさせる神秘的なものだ。不特定の人に向けられた親切な行為と同じく、それがどこから来るのかを私たちは知らない。

子どもの頃遊んだ野原は、イチゴ、ラズベリー、ブラックベリー、秋にはヒッコリーの実、ブーケにして母に持ち帰った野草などを私たちに惜しみなく与え、日曜日の午後には家族で散歩する所でもあった。そこは私たちの遊び場であり、避難所であり、野生の生き物たちの聖域であり、生態学の教室であり、石造りの壁の上に並べたブリキの缶を撃ち落とすことを覚えた場所でもあった。しかもすべて無償で。いや、無償だと思っていた。

その頃の私にとって、世界は贈与経済で成り立っていた。つまり、「商品やサービス」は、買うものでは

なくて、地球から贈り物として受け取るものだったのだ。もちろん、私は両親が、その草原とは遠く離れたところで世界を席卷する労働経済の中で、どれほど苦勞して家計をやりくりしていたか、まったく知らなかった。

私の家では、家族同士が贈り合うプレゼントはほとんど例外なく手作りだった。誰かのために手作りするもの——私はそれが贈り物の定義だと思っていたくらいだ。クリスマスのプレゼントも全部手作りだった。

空になったクロロックス「訳注：漂白剤のブランド名」のボトルで作る貯金箱、木製の洗濯バサミで作る鍋敷き、履き古した靴下で作る指人形。店で売っているプレゼントを買うお金がないからだ、と母は言ったが、私にはそれが辛いこととは思えなかった。それは特別なことだった。

父は野生のイチゴが大好きなので、父の日になると、母は必ずと言っていいほどイチゴのショートケーキを作った。ビスケットを焼き、ホイップクリームを泡立

てるのは母だったが、イチゴを摘むのは私たち子どもの役目で、父の日の前の土曜日に、それぞれが空き瓶を一個か二個持って野原に出かけた。イチゴは私たちの口に入るばかりで、瓶が一杯になるにはものすごく時間がかかった。ようやく家に戻ると、キッチンテーブルの上にイチゴを広げて、混ざっている虫を取り除いた。取り除ききれなかったものもあつたに違いないが、父はおまけのタンパク質のことは一度も口にできなかった。

実際、父はイチゴのショートケーキほど素晴らしいプレゼントはないと思っていた。少なくとも私たちはそう信じていた。それは決してお金で買うことのできない贈り物だったのだ。イチゴに育てられた私たちは、イチゴが、私たちからではなく野原そのものからの贈り物であることに気づいていなかった。私たちが贈ったのは、時間と気遣い、そして赤く染まった指だったのだ。そう、まさにハートの果実だ。

贈り物と義務

地球からの贈り物、あるいは私たちが互いに贈りあう贈り物は、そこにある関係を作り出す。与え、受け取り、相手に報いるという、ある種の義務が生まれるのだ。草原は私たちに贈り物を与え、私たちは父に贈り物をし、そしてイチゴにお返しをしようとした。果実の季節が終わると、イチゴは細くて赤い走茎を伸ばして新しい株を作る。走茎が、根を生やすのに適した場所を探して地面を伸びていく様子にすっかり魅了された私は、走茎が触れている地面の雑草を抜いて、ところどころ地面をむき出しにする。すると案の定、小さな小さな根が走茎から生えてきて、イチゴの時期が終わる頃には株はさらに増え、次の「イチゴの月」に花を咲かせるのである。私たちはこのことを誰に教わったわけでもない——イチゴがそれを見せてくれたのだ。イチゴが私たちに贈り物をくれたおかげで、私たちの間には今でも続く関係が生まれた。

近所の農家はイチゴをたくさん栽培していて、収穫

のためによく子どもたちを雇った。私たち兄弟も小遣い稼ぎに、クランドールさんの農場までの長い道のりを自転車で行った。一クオート「訳注…約三・八カッブ」摘むごとに一〇セント。でもクランドールさんの奥さんは見張りが厳しくて、胸当て付きのエプロンを着けてイチゴ畑の端に立ち、私たちに摘み方を指図し、一個も潰さないように気をつけなさいと言った。その他にも決まりがあった。「これは私のイチゴなの。あんたたちのイチゴじゃないの。だから食べちゃダメよ」。私にはその違いがわかっていた——我が家の裏の野原のイチゴは誰のものでもない。でもこの奥さんは、道端のスタンドで、一クオート六〇セントでイチゴを売っていたのだ。

この経験は、経済というものの良い勉強になった。イチゴを自転車の籠に入れて持って帰りたければ、その日の賃金のほとんどが飛んでしまう。もちろんそのイチゴは、野生のイチゴの一〇倍くらい大きかったけれど、美味しさではまるで敵わなかった。この畑育ち

のイチゴを父のためのショートケーキに使ったことは一度もないと思う。それをして何となくしつくりこなかったはずだ。

贈り物か、商品か——イチゴでも靴下でも、おかしなことに、それをあなたがどうやって入手したかによつてその性質はすっかり違ったものになる。店で買った赤とグレーの縞模様のウールの靴下は、暖かくて快適だし、羊毛を提供してくれた羊と編機を動かしてくれた人には感謝の気持ちを持てるといいと思う。

でもこの、商品として、持ち物としての靴下に対して、私には潜在的な義務はない。店員とは、お行儀よく交わす「ありがとう」の言葉の他にはどんなつながりもなく、私は靴下をお金で買ったのであつて、支払いが済んだ瞬間に私たちの相互関係は終了する。等価交換が成立すればそれで終わりだ。靴下は私の所有物になる。JCペニー「訳注…アメリカのデパートの名前」にお礼の手紙は書かない。

でも、それと同じ赤とグレーの縞模様の靴下が、祖母が私のために編んでくれた贈り物だったとしたらどうだろう？ 何もかもが変わってくる。贈り物は、それからずっと続く関係を生む。私はお礼の手紙を書くだろう。靴下を大切にするだろうし、もし私が気遣いのできる孫ならば、祖母がやって来るときには、たとえその靴下が気に入っていなくてもその靴下を履くだろう。そして祖母の誕生日にはもちろんお返しの贈り物をする。学者であり作家でもあるルイス・ハイドはこう言っている——「贈り物と商品の基本的な違いは、贈り物は二者の間に気持ちのつながりを作る、ということだ」

野生のイチゴは贈り物の定義に当てはまるが、スーパーで買うイチゴは当てはまらない。作る人と消費する人の関係がすべてを変えるのだ。贈り物を考えるのが好きな私は、野生のイチゴをスーパーで売っていたらひどく不快になるだろう。全部誘拐したくなるに決まっている。野生のイチゴは贈られるもので、売られ

るべきものではない。贈与経済においては、誰かに無償で与えられた贈り物は、誰か別の人の資本にはできない、とハイドは言っている。新聞の見出しが目に見えるようだ——「万引きで女を逮捕。イチゴ解放戦線が犯行声明」。

これと同じ理由で、私たちは本来、スイートグラスを売らない。私たちに無償で贈られたものなのだから、他の人にも無償で贈られるべきなのだ。私の大切な友人、ウォリー・ベア・メシゴードは、部族の儀式における火の守り人で、私たちのためにたくさんスイートグラスを使う。正しい方法でスイートグラスを採り、彼に届ける係の人たちにはいるのだが、それでも大きな儀式があると彼の手持ちがなくなってしまうことがある。パウワウやお祭りでは、部族の人たちが三つ編みのスイートグラスを一本一〇ドルで売っているのを見かける。儀式に使うスイートグラスが本当に足りなくなるとウォリーは、フライブレッドやビーズの束の売店に交じってスイートグラスを売っている、そういう

店に行く。そして売店の人に自己紹介して事情を説明し、草原でするのと同じように、スイートグラスに使用の許しを求める。彼にはそれを買うことはできない。お金を持っていないからではなくて、売ったり買ったりしたものは、儀式で求められるその本質的な価値が失われてしまうからだ。当然、店の人は快くそれを差し出してくれるものとウォリーは期待しているわけだが、中にはそうしない人もいる。年寄りが商品を巻き上げようとしていると思い、「無料^たつてわけにはいかないよ」と言うのである。だがまさにそこが重要なのだ。贈り物というのは無料である（ただしそこには、ある義務がついてくる）。スイートグラスが神聖なものであるためには、それを買ってはならないのだ。渋る売店主にウォリーはそのことを教えるが、決して金は払わない。

スイートグラスは母なる地球のものなのだ。スイートグラスを刈り取る者は、自分で使ったり、コミュニティが使ったりするために、正しい方法で、敬意を

示しつつそれを刈り取る。地球にお返しに贈り物を捧げるし、スイートグラスが健康に育つように世話をす。三つ編みにしたスイートグラスは、相手を敬い、感謝し、癒し、強くするために贈られるものだ。スイートグラスは立ち止まらない。ウォリーがスイートグラスを燃やすとき、それは手から手へと伝わった贈り物であり、持ち主が変わるたびに払われた敬意がそれをさらに価値あるものになっている。

贈り物とは根本的にそういうものなのだ。人から人へと贈られ、それとともにその価値は増していく。草原が私たちにイチゴを贈り、私たちはそれを父に贈った。分かち合えば分かち合うほど、その価値は大きくなる。このことは、私有財産という概念に染まり、当然ながら他人とはそれを分かち合うことがない社会においては理解するのが難しいだろう。たとえば、立ち入り禁止、という看板を所有地に立てるのは、個人の不動産所有を重視する社会では当然のこととして受け

入れられるが、土地はすべての人に与えられた贈り物であると考える経済観においては受け入れられない。

ルイス・ハイドはこの違いを、「インディアン・ギバー」という言葉についての考察の中で見事に浮き彫りにしている。この言葉は今日、一度与えたものを取り戻したがる人という、非難めいた否定的な意味で使われるが、実はこれは、贈与経済によって成り立つ土着文化と、私有財産という概念に基礎を置く植民地支配的文化の間で起こった、異文化間の誤解に起因している。もともとその土地に住んでいた先住民が入植者に贈り物を贈ったとき、受け取った者たちは、それは価値ある物で、その先ずつと自分たちが持ち続けるべきものと考えた。それを他の人に贈るのは無礼なことを考えたのである。だが先住民にとって、贈り物の価値は互惠の関係に根ざしており、その贈り物が巡り巡って自分の元に戻ってこなければそれこそが無礼だった。私たちに伝わる古い教えの多くは、何であれ、自分に与えられたものは再び他の人に与えなくては

けない、と言っているのだ。

私有財産を基本とした経済の観点から見れば、「贈

必需品のあれこれを売っている者、植民地のシスターをまとい、ネイビーブルーの山高帽を被った者

けない、と言っているのだ。

私有財産を基本とした経済の観点から見れば、「贈り物」には対価は支払われないから当然「無料」である。だが贈与経済においては、贈り物は無料ではない。贈り物の本質とは、それがある関係性を築く、ということだ。贈与経済の根底にある通貨はレシプロシティである。西欧的な考え方では、私有地とは「一括権利」のことであるが、贈与経済においては、所有物には「一括義務」がついてくるのである。

贈り物か、商品か

アンデス山地で環境の調査をするという幸運に恵まれたことがある。一番楽しかったのは地元の村に市が立つ日で、広場には行商人が溢れた。バナナを山積みにしたテーブル、採りたてのパイヤを積んだ手押し車、トマトをピラミッドのように積み上げた色鮮やかな売店、毛むくじらの根芋を入れた手桶。地面に毛布を広げて、サンダルから椰子の葉で編んだ帽子まで、

必需品のあれこれ売っている者。縞模様のショールをまとい、ネイビーブルーの山高帽を被って赤い毛布の後ろにしゃがんだ女性は、彼女の顔と同じくらい美しい皺の寄った、薬になる植物の根を並べて売っていた。さまざまな色彩、薪の火で焼いているトウモロコシや鋭いライムの香り、そして人々の声が、私の記憶の中で美しく混ざり合っている。私のお気に入りの売店の店主であるエディータは毎日私を待っていて、見慣れない食べ物の料理の仕方を親切に説明してくれた。テーブルの下に一番甘そうなパイナップルを隠しておいてくれたりした。一度など、イチゴを売っていたこともある。私が払ったのが「白人価格」だったことはわかってはいるが、その豊かさと善意の体験は十分にそれに値するものだった。

つい先日、その市が、鮮やかな質感とともに私の夢に出てきた。私はいつものように腕に籠を抱えて売店を縫って歩き、エディータの店に採りたてのコリアンダーを買いに行く。楽しくおしゃべりした後、お金

を払おうとするとエディータは、要らない、と手を振り、軽く私の腕を叩いて立ち去らせようとする。贈り物よ、と彼女が言う。どうもありがとう、と私は答える。お気に入りのパン屋では、丸いパンの上に清潔な布をかけてある。私はパンをいくつか選んで財布を開けるが、この店主もまた、まるでお金を払おうとするのが失礼なことでもあるかのように、要らない、と身ぶりで示す。私は困惑して周りを見回す——見慣れた市場のはずなのに、様子がガラリと変わっている。私だけではなく、誰もお金を払っていないのだ。私はすっかり嬉しくなって、市場を足取り軽く歩き回る。ここで使える通貨は感謝だけなのだ。すべては贈り物なのである。まるで野原でイチゴを摘んでいるみたいだ——行商人たちは、地球からの贈り物を次の人に手渡す仲介者にすぎないのである。

私は自分の籠の中身を眺める。ズッキーニが二本、玉ねぎ一個、トマト、パン、それにコリアンダー。籠はまだ半分空だが、一杯になったみたいに感じる。必

要なものは全部揃っている。私はチーズを売っている店に目をやり、買おうかな、と考えるが、買うのではなくてもらうことになることを考え、やっぱりやめることにする。おかしいものだ——市場にあるものが全部、単にとて安いだっただらう、たぶん私はできるだけたくさんのもを買っただらう。でも全部が贈り物となったら、自制心が働いたのだ。必要以上のものは受け取りたくない。そして、明日私は何をお礼に持ってこようかと考え始めた。

もちろん、その夢は消えてしまったが、とても嬉しかった気持ちと自制心は消えなかった。それ以来何度かそのことを考え、私はそのとき、市場経済から贈与経済へ、私的財産から共有財産への転換を目の当たりにしたのだということが今ではわかる。そしてその転換によって私たちの関係は、手に入れた食べ物と同じくらい滋養たっぷりのものになった。売店や毛布の上で、暖かさと思いやりが手から手へと渡った。私たちに与えられたもののすべての豊かさを、ともに喜び合っ

ただ。そしてすべての人の籠に食べ物があつた。公平だつた。

私は植物を科学的に研究する者であり、明解さを好む。でも同時に私は詩人でもあり、世界は比喻を通して私に語りかける。イチゴが贈り物であると言うとき私は、*Fragaria virginiana* (バージニアイチゴ) が一晩中寝ずに、私だけのために贈り物を用意し、私が夏の朝に欲しがらうものを用意しようと戦略を練っていると言っているわけではない。私の知る限り、そんなことは起こらない。だが科学者として私は、私たちが知っていることがどれほど少ないかを知っている。イチゴの苗は実際に一晩中、小さな糖分の塊と種を、香りと色を作っていたのだ。そうすることで進化学的適性が増すからである。動物——たとえば私——を惹き寄せて果実を拡散させられれば、美味しさを作る遺伝子が後に続く世代に伝わる確率は、美味しい実がつかなかった株よりも高くなる。その株が結んだ実の出来具合が散布者の行動を決め、適応できるかどうかを

決めるのだ。

私が言おうとしているのはもちろん、私たち人間とイチゴの関係は、私たちがそれをどう考えるかで変わってくる、ということだ。この世界を贈り物に変えるのは人間の視点である。そういう視点で世界を眺めれば、イチゴと人間はどちらも変容する。そうやって生まれた感謝と相互依存の関係によって、イチゴと人間両方の進化学的適性が増す。自然界を尊敬し、相互依存の精神で接する生き物や文化は、自然界を破壊する人々と比べて、次の世代にその遺伝子が伝わる確率が高いに決まっている。私たちの行動を決めるためにどんな物語を選択するかによって、適応できるかどうかが決まるのだ。

贈与経済について広範囲に研究したルイス・ハイドは、「物が豊富であり続けるのは、それが贈り物として扱われるから」であると考えている。自然と贈り物でつながる関係とは、「秩序立ったギブ・アンド・テイクの関係であり、人間が自然の増加に参画し、依存して

いることを認識する。往々にして、自分の一部として自然に接し、搾取対象となる他者、よそ者とは考えない。取引の手段として好まれるのは贈り物の交換である。それによって、(自然の)増大と調和し、あるいはそれに関与できるからだ」と彼は言う。

その昔、人々の生活が、暮らしている土地と直接的に結びついていた頃は、この世界が贈り物であることは明らかだった。秋になると、「来たよ」と鳴く雁の群れで空が暗くなるほどだった。それはみなに、スカイウーマンを雁が助けた創造の物語を思い起こさせた。人々はお腹を空かせ、冬が近づいている。そこへ雁たちが飛んできて、沼を食べ物でいっぱいにするのだ。それは贈り物であり、人々は、感謝と愛、尊敬とともにそれを受け取った。

だが、空を飛ぶ鳥の群れから食べ物を得ることがなくなり、温かった羽が自分の手の中で冷たくなっていくのを感じることがなく、自分の命のために一つの命が与えられたのだということがわからず、それに対

する感謝の気持ちを感じなくなると、その食べ物では満足できなくなってしまう。お腹はいっぱいでも、魂は空腹のままなのだ。発泡スチロールのトレーに乗り、つるつるしたビニールに包まれた食べ物。狭い檻の中でしか生きられなかった動物の死骸。それは贈られたのではなく、盗まれた命である。

この現代社会で、地球が贈り物であることをもう一度理解し、私たちと世界の神聖なつながりを取り戻すために、私たちはどうすればいいのだろうか。みなが狩猟採集をして暮らせるわけではないことはわかってい——自然界は私たちみなを担いきれないだろう。だが、市場経済において、「あたかも」この自然界が贈り物であるかのように振る舞うことはできないだろうか？

ウォリーの言葉に耳を傾けることから始めよう。贈り物を金で売ろうとする人はいるだろう。でも、売りの物のスイートグラスについてウォリーが言うように、

「買ってはいけない」。売買に加担するのを拒むのは高潔な選択だ。水は万人に与えられた贈り物であって、売ったり買ったりするためのものではない。買ってはいけない。収穫高が増すからと言って、土壌を消耗させ、動物や植物に有害な方法で大地から奪い取った食べ物は、買ってはいけない。

物理的なことを言えば、イチゴは誰のものでもない。私たちが選ぶ取引の方法が、万人への贈り物として分かち合うのか、それとも私有財産として販売するのかを決める。その選択が重要なのである。人間の歴史においては、人々が共有の資源を分かち合うというのがルールだった時代の方が長いし、現在でもそういうところはある。だが、一部の人がそれとは違う筋書きを考案した。すべてのものは売ったり買ったりできる商品だとする社会的構成概念だ。市場経済という筋書きは野火のように広がり、人間だけが幸せで自然界はめっちゃめっちゃになるという偏った結果を生んだ。だがそれは私たちが勝手に自分に語って聞かせた物語にすぎず、それとは別の物語、かつての物語を取り戻す自由が私たちにはある。

そうした物語の一つは、私たちが依存している生命体システムを維持する。世界の豊かさと寛大さに感謝し、畏怖しつつ生きる、という物語もあるし、私たちも同様の贈り物を分け与えてこの世界とのつながりを祝福することを求める物語もある。選ぶことができるのだ。この世界のすべてが商品なのだとしたら、私たちはとても貧しくなる。この世界のすべてが手から手へ移りゆく贈り物なのだとしたら、私たちはどんなに豊かになることか。

子どもの頃、イチゴが熟すのを待っていたあの草原で、白くて酸っぱいイチゴをよく食べたものだ。お腹が空いたからそうしたことあったけれど、大抵はただ待ちきれなかったからだ。目先の欲が先々どんな結果をもたらすかはわかっていただけで、やっぱり食べてしまった。幸運なことに、葉の下で熟れていくイチゴと同様、人の自制心はだんだん成長するものだ

から、私もやがて待つことを覚えた。少しだけだけれど。野原に仰向けに寝転んで雲が動いていくのを眺めては、数分ごとに体の向きを変えてイチゴは熟れたかとチェックしたのを覚えている。子どもの頃は、それくらい早く変化するものだったのだ。歳をとった今では、変容には時間がかかるものであることを私は知っている。商品経済は四百年前からこのタートルアイランドに存在し、まだ白いイチゴやその他のあらゆるものを食べ尽くしてしまった。けれども人々は、その酸っぱさにうんざりしている。私たちは今再び、贈り物でできた世界に暮らしたいと願うようになりつつある。そういう世界の匂いを私は感じるのだ――まるで、熟したイチゴの香りが風に漂ってくるように。

捧げものをする

私たちの部族は、カヌーくことを強制されるまでは、の住まいは取り上げられ、小屋が与えられた。一つの輪のちはばらばらにされた。私たちに共有していた言葉を、彼らは忘れた。まだ

子どもの頃、夏の朝は大抵めた。蝶番が軋む音、続いてう濁った音。ぼんやりと、モ声、湖岸を打つ波の音を聞き、はつきりしてきて、それから